

九州蕉門の研究 : (二) 『漆川集』 と筑前嘉穂俳壇 について

杉浦, 正一郎

<https://doi.org/10.15017/2332916>

出版情報 : 文學研究. 46, pp.31-80, 1953-08-25. 九州文学会
バージョン :
権利関係 :

九州蕉門の研究

—(一)『漆川集』と筑前嘉穂俳壇についで—

杉浦正一郎

この度、新に紹介する事になつた『漆川集』は、宝永四年刊、京の井筒屋庄兵衛板『蕉門俳書目録』の記載により、従来その書名のみ知られてゐて、その内容の世に知られなかつた俳書である。即ち同目録には

漆川 一 同 筑前土明 一 句五分

と記されてゐる。「同」と云ふのはその書の前掲俳書の刊年と同じと云ふので、宝永三年の事である。尙、同目録によると、此年には『漆川集』の外に九州俳人の手になる『折目高』（肥後軽蘆撰）、『七異跡集』（豊後馬貞撰）、『蟻の宿』（肥後台軒撰）、『梅が香・彦山家』（豊後野紅撰）等の俳書が刊行されてゐるのを知り得るのであるが、今迄僅か『七異跡集』のみしか紹介されず、九州蕉門の研究には甚だ不便を感じてゐたのであり、今こゝに新に『漆川集』を加へる事になつた次第である。

扱て、『漆川集』は半紙本一冊、薄茶色表紙、題簽は中央に「誦漆川 土明撰」とあり、柱は「うるし（一一三十六）」といふ風にみえ、丁数全卅六丁で一丁表裏に八行づゝ記されてゐる。又板下は後の『芭蕉盃』と書法筆癖が類似してを

り、朱拙の筆になるやうである。

撰者土明は、宝永三年刊、魯九撰『春の鹿』に、

「土くれのすくなく走ルうつら哉 漆生源太夫土明」と見え、筑前嘉摩郡（今嘉穂郡と云）稲築村漆生の人、野見山氏

源太夫で、俳壇的に殆ど無名の新人で、この年以前には嘉穂郡内野の荒巻助然撰『蝶姿』（元禄十四年刊）や同郡大隈の

大村知方撰『初便』（同十四年刊）同郡鯉田の朝三堂季水撰『土大根』（宝永二年刊）にもその名を見出す事が出来ない。

唯、僅かに前年の宝永二年刊、助然の『続山彦』に

「見ぬふりて被カクキとおすやおほる月 同嘉摩土明」の一句を見出すに過ぎない。肩書の「嘉摩」と云ふのは嘉穂郡の旧

郡名である。又同三年刊の長野馬貞撰『七異跡集』に

「陽灸の持直してや念仏水 チクセン漆生土明」の一句が入集してゐる。土明の句は管見の限りでは宝永六年刊、朱拙

後見の美作の杉山輪雪撰『星合集』に

「初時雨ようあそぶのに照りかゝり 筑前漆生土明」の一句、同年刊同じく朱拙後見の讃岐の大西吟墨撰『既望集』に

「寝て居るか螢の来やう只でなし 同漆生土明」の句が一句それ／＼入集してゐる。又享保九年刊の漆生から程近い飯

塚の菊田有隣と朱拙共撰の『芭蕉盃』に

鶯に笠の緒つまる替かな 漆川 土明

寝て居るか螢の来やう只でなし 同

酒貫に追手のかゝるすゞみかな 同

照りかけて遊びあきれし時雨哉

同

野火留の具も枯野の嵐哉

同

等五句を見出し得るに過ぎない。尙、注目すべき事はこの『芭蕉盃』に「土明娘九歳 あきら」として

別れ場に狐だますな郭公

鳥の寝る藪に火とぼす螢哉

の二句が入集している。これによると彼の娘も父の感化で、幼くして俳諧を嗜んでゐたものと思はれる。尙、土明の生歿享年共に不明。現在、漆生に野見山と云ふ旧家が現存しているので、調査の結果は或ひは墓や過去帳等見出し得るかも知れない。

同集書名は跋に記す如く、筑前の国にあるといふ漆川の古地名を、宗祇の『指南抄』によつて土明住処の漆生に求め、「我が方の最負」で、朱拙旅寝の折、「漆川」の題詠で人々の句を求めたのである。

いさり込む山松寒し漆川

土明

梅咲てとるやら寒し漆川

助然

腰懸て春待鳥や漆川

知方

此組て木の葉さらえよ漆川

朱拙

これによつて本集を『漆川』と名づけたのである。

ところで漆川に就ては伊藤常足著『太宰府管内志』（天保十二年成）に次の様な説明があるので参考迄に次に引

用しよう。

○漆川

拾遺和歌集 名にはいへど黒くも見えず漆川さすかに渡る人はぬるめり

又、八雲御抄に漆川筑前、又宗祇指南抄に漆川は嘉摩郡漆生と世俗に云、在所など見えたり。今も嘉摩郡漆生村又漆生川あり。一説に漆川へ御笠那にありとす、又一説に肥後国託麻郡漆島漆川ありとす、なほよく考ふへし。

本集は勿論、宝永二年十二月、朱拙が漆生に旅寝の折に彼の助力、後見によつて成つたもので、採録の発句の多くが他の朱拙後見俳書と同じく彼が蒐集してゐたものを提供して、土明に編者の名譽を担はしめたものと思はれ、而して翌三年に京の井筒屋から刊行されたのであつた。ところで本書三丁に見える、

化粧水、横まくら、念仏水といふは豊後の名蹤なりと朱拙が文に聞えければ

蝶くの花にはこふや化粧水

伊賀 土 芳

あはれ露一粒撰に横まくら

同 半 残

秋立ちてちらりとしけり念仏水

同 非 群

等の句は、土芳の『養虫庵集』の「宝永二乙酉年」の項に、

正月廿八日、豊後朱拙より消息に所の名所の題を方々に配りて句を願ふよし依て

化粧水・舟岡山

蝶々の花にはこふや化粧水

舟岡の空や田中の刈残し

とあり、此年正月既に朱拙には本書編纂の意図があり、伊賀の土方に句を求め、又同様に半残、非群等にも別題のもとに句を求めてゐたものと考へられる。然し、かうした句稿の蒐集は『漆川集』撰集の爲とみるより、他のさうした名所による俳書編集の意図のもとに行はれたとも思はれる。前引、長野馬貞撰『七異跡集』（宝永三年刊）第三に「念仏水」として、非群の「秋立てちらりとしたる念仏水」の句が入集してゐる。或は初め朱拙の意図では「化粧水」「横まくら」等の項目も含まれてゐたのかも知れず、それが何かの事情で『七異跡集』編集の折に除かれたので、土明の『漆川集』に採録されたものと思はれる。

次に本書の内容の解説に入る前に序者、坂本朱拙及び筑前嘉穂俳壇の状態に就て概述しよう。朱拙は四方郎・四野人・守拙・半山とも号し、豊後日田城内村の住、医を業とした。若年の折は儒学に励んで儒者として諸侯に仕官の希望があつたがならず、遂に俳諧師になつたと云ふ（『龜山鈔』『豊西俳諧古哲伝草稿』）。俳諧は同郷の井原西鶴門、中村西国によつて談林風を嗜んでゐた様である。彼の著『梅桜』の菊人序や、同じく『後れ馳』の風国序、及び朱拙奥書に依つて考へるに、彼はこの辺陲の地にあつて秀れた俳人に会ふ事も出来ず、たゞ「詩俳の吟鬚をひねりて風興」に耽つてゐたらしく、謂はゞ当時談林の田舎俳士に過ぎなかつた。しかるに注目すべき事は後年の『土大根』や『芭蕉盃』に於て、朱拙は宗因や芭蕉と因みを結んでゐた様に述べてをり、この事実の正否は未だ明確になし得ないが、これは初期の彼の著作に見られる事実と矛盾する様に思はれる。とまれ朱拙が蕉門俳人として立つ様になつたのは、元禄八年、かの蕉門風狂の士、広瀬惟然の九州行脚以後であつた。惟然はこの年の暮、肥後小国より日田に吟を曳き、こゝに暫く旅寝を重ねて「こゝろ

をきなく疲をはらして、日をかさねし閑さの余りに、蕉門の寂あり、花ある事を勤め励まし」(『後れ馳』風国序)たのであり、朱拙は惟然に随従して蕉風になじむ様になつたのであつた。斯くて惟然の頭陀に納められてゐた朱拙及び日田俳人の句は、当時洛に住してゐた惟然が同地の風国と親しくしてゐた関係で、風国の『初蟬』(元祿九年刊)によつて、初めて蕉門俳壇に紹介される事となつた。惟然と風国との斯うした関係は、例へば『惟然の研究』(鈴木重雅氏著)所引の殿田良作氏旧蔵元祿十一年五月朔日付、浪化宛風国書簡に「惟然も東武に罷在候て尊家様より入句申来候間、西国の者共の句も進上さしく様(まづ)に申し候」と見え、風国はは惟然の依頼によつて西国の者共の句を越の浪化の集の句稿として寄せてをり、浪化の『続有磯海』には朱拙及びその他日田俳人の句を多く採録してゐるのである。

斯うした関係は又朱拙を風国に近づける事にもなつた。『梅桜』には「追加」として風国・朱拙・泥足・惟然・壺中一座の歌仙が納められてをり、此頃朱拙は上洛して風国その他在洛の蕉門俳人達にも親んだものと思はれる。そして風国は『菊の香』(元祿十年刊)にも朱拙及び日田俳人の句を多く録し、朱拙の『後れ馳』には序を与へてゐる。『泊船集』の「豊後朱拙此春登りあはんなといひ来しけるに」といふ前書ある「もろともに影を踏へき花の陰 風国」の句や『初便』の「四方郎とあつまのかたの遊吟あらかしめちぎりて」の前書のついた「月花や共に四方のこゝろさし 風国」の句等によつて風国と朱拙との親密な関係が理解されよう。で元祿十四年七月風国死去の際には、朱拙の「梅がかやかひなき闇のさくり足」の発句を立句として日田俳人達ははるかに追善興行を催し、一周忌にも追善百韻を興行してゐる。釣壺は『西の詞』(元祿十五年刊)に「洛の風国(中略)予が里の風騒と水魚のごとし、洛にて馴染たるも在、深切の誹友なれハ云々」と記してをり、朱拙以外の日田俳人との深い交情も推察される。

斯くて朱拙は『梅桜』（元祿十年刊）、『後れ馳』（同十一年刊）、『今日の昔』（同十二年刊等）の撰集を相次いでものし、又多くの蕉門高弟と親しい關係を持つに至つて九州蕉門俳人として不動の位置を築くに至つた。なほ、從來一部に朱拙を正秀門と見る説があるが、以上の考察からも従ひ難いと思ふ。但し後年、享保年代に入つて親しく正秀と交際してゐた様ではあるが、これは俳友程度の關係と思はれる。

さて、次に嘉穂俳壇の状態について概観するが、同地方は朱拙の行脚以前に於ては俳壇的に殆ど未開拓地であつた。『放鳥集』（元祿十四年刊）に元祿五年の路通の九州行脚の折の句と思はれる

豊前の国猪膝にて

夏草の落つくほとや旅心

路通

の句が見えるが、猪膝は現在の田川郡猪位金村猪膝であり、嘉穂郡に接し、猪膝を通過するには必ず嘉穂地方を通らねばならないのであり、路通も此地方を通過したものと考へられる。又惟然も元祿八年九州行脚の折、同地方に杖を曳いてゐる。

飯塚にて

粟の穂をこぼしてこゝら啼鶉

惟然

の句が『後れ馳』に見える。元祿十一年長崎に帰省してゐた去来は翌年上洛の時にはこゝを通過したと思はれる。『初便』に

筑前直方にて

九州蕉門の研究

行秋や花にふくるゝ旅衣

去来

の句が見える。この様に二・三の蕉門高弟達が此地に行脚の足を運んでゐるものゝ何ら俳壇的成果も見ることが出来ない。

元祿十年秋、朱拙は長崎を訪れ、同地の卯七と俳諧を興行し、次いで筑後柳川、筑前鞍手、同黒崎と行脚の足を延ばしてゐる。この時は嘉穂地方俳人との交渉は見られないが、鞍手地方では可成り交渉が行はれたらしく、翌年の朱拙撰『今日の昔』に直方―丹山・外川。頓野―一定・如雪・杉明・直水・友水の句が入集してをり、これが蕉門俳書に見える鞍手地方俳人の最初のものである。

元祿十二年秋、博多に旅浪を重ねてゐた朱拙は、肥前田代の寺崎紫白女の招請によつて田代に笈を運んだが、やがて紫白女その他田代の俳人達を指導する様になり、こゝに紫白女の女性撰最初の俳書『菊の道』(元祿十三年刊)が朱拙後見によつて刊行される關係が結ばれた。朱拙はこの旅の時、嘉穂の鯉田から直方、黒崎迄行脚してをり、鯉田滞在中、後『土大根』の撰者季翠(季水)の許に泊り、交誼を結んだものと思はれる。『菊の道』には嘉穂地方俳人の句として鯉田の季翠の句が初めて見られるのである。即ち、

「むき／＼にわかるゝ空の秋の雲 筑前鯉田 季翠」といふ句で、これはその前句に「朱拙に別る四句」と前書して掲げられた句の中の一句の一つである。

元祿十四年二月、朱拙は再び嘉穂地方に笈を運んで内野の荒巻助然亭に旅泊し、俳諧に就て助然と親しく応答し、且つ助然が久しく笈底に貯へ置いた蕉門高弟の句に、朱拙蒐集するところの句稿を与へ、序文を寄せて、こゝに同地方最初の俳書『蝶姿』が上梓されたのである。助然は、管見の限りではこの年の三河の白雪撰『きれ／＼』に初めて入句してゐる

に過ぎない新人であつた。『蝶姿』は地域的な關係で筑前、特に鞍手・嘉穂地方の俳人の句を多く採録してゐる。例へば嘉穂俳人として鯉田―季翠・素艸。上穂波―冷村。天道町―遊水。大隈町―土偶堂。嘉磨―知方。太郎丸―其紅・野涼。内野―助然・三郎次・長太夫・万水・藤乎・野然・辰之助・白之・水露等の俳人の名が見える。朱拙は此年二月、内野からの帰途田代を訪れ、同地の寺崎晚柳を後見して『放鳥集』を編集、上梓せしめた。その句稿多くは朱拙の与へるところのものであるべく序文も亦朱拙の筆になるものである。

此年冬、朱拙は又々嘉穂地方を訪れ、同地の散木亭に旅寝してゐる。この時、近くの朱拙の指導下にあつた人々、一定・知方・助然・藤乎・冷村・野涼・鬼紅・此及・又推等の俳人達が集まり、朱拙の句を立句に俳諧が興行された。

我が旅ねをとほれし好事とともに、散木亭に落こぼれて

寒ンたけも見よせて軽し雁の羽

吹はがれたる木がらしの月

雪下の着ものには血のたりて

尻からげから上の土サライ

海つきは昨日の花を上カミの沙汰

寒みの退て口のほどける

(以下略)

朱	散	一	知	助	藤
拙	木	定	方	然	乎

翌十五年正月、朱拙は牛隈の大村知方を援助して『初便』が成つた。本集には惟然が跋を寄せてゐる。その跋に「筑紫

筑前好士大村氏知方子我が翁の風流をあまない（中略）よの常、朱拙によりて琢磨せられけるとぞ。終に其功あらはれて、この比一つの撰あり、初たよるといふ」と述べてをり、知方が朱拙に師事し、その教を受けてゐた事は明白である。本集には筑前穂波として助然・冷村・鬼紅・野涼・又推・此及、嘉磨―梅坡・舍若・散木の句が見える。こゝに助然を穂波の住としてゐるのはいぶかしくおそらく誤りであらう。

元禄十五年から同十六年にかけて志太野坡が九州行脚に来たり、久留米・日田・博多等に俳壇勢力拡張の爲の旅寝を重ねたが、この時野坡は内野の助然の許をも訪れてゐる。

宝永元年冬、朱拙は筑前内野の助然の亭に足を休め、それから近くの穂波の比及亭を訪れた。

助然亭にまろびこみしは、しぐれ月の廿日あまり一日になむ

夜道打耳の根摺て、鴨の声

朱 拙（続山彦）

筑前の比及亭興行

雪まつか胴声せばる鳥の声

朱 拙（土大根）

それから東北二里程の鯉田の朝三堂季水を尋ねた。こゝに旅寝を重ねてゐる間、直方の一定・市水等の人々、その他内野の助然も訪ねて、逝いて間もない文章・去来等の事や俳壇の動向について頻りに話が交はされた。

文章の飛揚もむなしく、去来のカヘシヤラ販鞍のとりはづして、なにとやら風雅もさうくしきおりから、四方郎の旅ねゆくしく、笈もかくしつなどきくとして、こゝの風士等も訪れ来れば

蝶鳥にかせぎ当たる大根年

季 水

上 日よくても元の十月
念比な旦那をそしる口出して
昏帳ふみあふ足のおほきさ
名月に落て塞けて夜の速き

(以下略)

朱 拙
一 定
會 木
助 然

朱拙は又季水亭滞在中に季水に助力して『土大根』の編纂に取りかかり、翌年上梓した。本集には助然・季水・一定・會木・野涼・市水・知方等の句を録し、又朱拙と季水との俳諧問答を多く記載してゐる。跋に季水は「四方郎と一時戯興の事、世に広がれといふにはあらねど、我がかたの者のたよりならしめむと」思ひ上梓した事を述べてゐる。然し内容を閱するに前年の知方の『初便』と吾仲の『枕かけ』との間に編集様式の類似について問題が起り、吾仲等から非難を受けたのに反撥して編集されてゐる様に思はれる。

宝永二年には助然撰『山彦』『続山彦』が板行された。この『続山彦』に『漆川』の撰者土明の名が初めて見えるのである。この年八月、九州行脚中の美濃の孤耕庵魯九が博多から嘉穂地方に足を入れた。

内野 助然亭

八朔の名に呼かしや萩の花

魯 九

魯九の『春の鹿』(宝永三年刊)には同地方俳人の句が収められてゐる。本書は入集作者の俳号の上に本名が書加へられてゐて甚だ便利であるので次に引川してみよう。尙、土明の句は前引したからこゝには繰り返さない。

鈴ぶつて馬も戻るや早稲の花

荒巻佐平次 助 然

雲色ののほせて来るや渡り鳥

大庭太右門 藤 乎

村雨に崩れて散るや稲雀

荒巻三郎二 楚 蓓

竹藪の間をぬけてや早稲のかさ

正 円 寺 百 之 蓓

出格子の二間なをりて月夜哉

土多助二郎 季 水

燕ラにとこてあふたそ渡る雁

原田平助 衣 振

月につれて尾もはたらくや鶉の声

直方吉右門 外 川

七夕や移りとゞけて草の上

小野上彌平次 其 紅

夕飯はなくともすませ初月夜

小屋瀬宗十郎 曾 乙

右の中、直方の住以下は嘉穂でなく、鞍手に属するが便宜こゝに挙げておいた。此年秋八月、豊後玖珠の馬貞のもとに旅寝して「龍門瀑布之記」を馬貞の『七異跡集』の為に書与へた朱拙は、歩行神につかれた如く遠く筑前地方に足をすゝめ、十二月に嘉穂の漆生、土明亭に笠をぬいだ。『七異跡集』には助然・土明・知方・其紅の句が入集している。土明亭では何時もの朱拙来遊の時の様に俳人達が集まり、漆川についての題詠がなされたり、歌仙が巻かれたりした。

四方郎のたゞずまゐを戯れに画して茅屋になくさめるおりから、爰の連衆に遠近の友もまろびこみて、一日のとやきとなし侍りぬ

短トウラ衣ウラ着る形も冬野の旅鶉

野 吟

今年も雪は西国が勝
 大胆な舟で仕当る分限にて
 噂ばかりに御触ついやむ
 あり有て肴のとれぬ月の比
 生綿キヌダの内は意地と又降
 あとてなき姫路の盆のかすかなり
 浪く中に鐘もうち喰ふ

(以下略)

(漆川)

朱	知	甫	季	野	助	士
拙	方	道	水	情	然	明

此滞在中、朱拙は何時もの編集癖にとりつかれ、俳壇的に有名でない新人士明に蒐集の句稿を提供し、且、序文を書き与へて一集の撰者たることをすゝめた。その序に「此所、西に助、然、北に季、水、南に知、方、おりて、各々その手をかためたり。今亦此主東方を塞げつれば、いかなる吟人狂客入替くあら手を寄せたりとも、句吹ばやの精兵四人がこゝろを合せて茶つけ攻にせめ付たらば、つるにやり句を出させず。声先の高名には大盆を投出して右往左往に飲ちらさば、むくつきやつこ豆腐も座中にたまらず、大勢に頭巾をおろさせむ事、日をかぞへて待べし」と述べてゐるのに依ると、宝永年代に入つて急に九州地方の俳壇勢力拡張に乗り出した野坡を初め、その他の行脚俳人達に対し、朱拙の指導下にある嘉穂俳壇の結束を強固になす為に、こゝに土明を後見して四たび朱拙は撰集に當つたものと考へられる。

扱て『漆川集』は発句二百句を先づ名所・餞別留別贈答・哀傷并懐旧・祝言・以後季題を四季の順序に大凡配列してを

り、部類としては可成り乱雑な様である。そして巻頭には芭蕉、巻末には朱拙の句をそへてをり、次に前掲の朱拙及び嘉穂俳人との歌仙一卷を納め、跋は土明自ら『漆川』の来歴について記し、その中に漆川を詠んだ諸俳人の発句八句を並べてゐる。作家の総数は九十五人、うち五十人が九州俳人、残り四十五人が九州以外の俳人である。九州以外の俳人と云ふのは江戸・尾張・美濃・越中・湖南・京・大坂・伊賀・伊勢の俳人で、芭蕉・惟然・杉風・野坡・其角・嵐雪・史邦・露川・白雪・木因・荆口・魯九・如行・千川・怒風・素覧・嵐青・浪化・酒堂・文章・正秀・許六・楚江・智月・去来・為有・飄竹・舍羅・土芳・半残・非群・万乎・涼菟等、蕉門名家揃ひの錚々たる顔触れである。

九州俳人は豊前・豊後・筑前・肥前・肥後の人々で、特に半数の廿二人は筑前の俳人である。参考迄に筑前俳人の名を掲げる。野吟・一定・是寸・知方・助然・季水・甫道・野情・野涼・霜輪・又推・紅玉・其紅・市水・松律・散木・為百・風然・至州・冷村・一器・梅旭。

次に集中の発句について二・三愚考を述べてみよう。巻頭の芭蕉の「箱根越す人もあるらし今朝の雪」には「天和の初吟なるよし」といふ添書があるが、これは編者の間違ひで、貞享四年十二月の卯辰紀行の折の吟で、『笈の小文』の中に「蓬左の人々に迎ひとられて、暫く休息する程、箱根越す人も有るらし今朝の雪」と、あると全く同形で見える。この句又『如行子』にも見え、それには「四日はみのやの聴雪にとゞめらるゝ、その夜の会」と前書があり、十二月四日、熱田の聴雪亭での作である事は明らかである。

「崎水の宇鹿とぶごの地に別るとて」の前書ある朱拙の句は、宝永二年二月十日、西田宇鹿が遙々日田に吟杖を曳き、椿底舎、その他を訪れたときの作である。宇鹿は日田に十日間程滞在して去つたのであるが、この句はその折の送別吟で

あり、りん女自筆稿本『若艸』によると、朱拙はこの外に

餞 別

故郷のよめなに喰あき、ほこのつくしもつみすて、ひとりすらねたましかるべき折からのたゞまひなるに、風衲泰軒のかたをも我がものにとり添られし崎陽の宇鹿子に別侍るとして

初花に列まで取て別かな

朱 拙

の餞別吟をものしてゐる。この文中泰軒とあるのは『蟻の宿』（此の書はまだその発見が報告されてゐない未紹介のものである）の撰者、肥後の泰軒で、一阿誰軒の目録には「台軒」と見えてゐる。一同じく日田に旅寝してゐたが宇鹿と共に旅立つていつたのである。この時の日田俳人との交歓の様は前記りん女の『若艸』に詳しい。宇鹿の「稻妻も」の句の前書によると、其後も両者の間に文通が行はれてをり、五月朱拙が愛児を失つた際、早速宇鹿は哀傷の句を寄せてゐるのである。

朱拙の「養虫の荷は」の句の前書「伊勢の涼菟、我が郷に年をへて、睦月の十日あまり、肥後の方に赴けるに」に依つて涼菟が日田を出立した日時と行先とを知り得る。涼菟は『中やどり』（宝永二年刊）、『しるしの竿』（同二年刊）によると宝永元年十二月、中津から耶馬溪を経て日田に入り、此処で越年してゐるのである。

野 紅 亭

櫓の火に先おちつきぬむめの花

涼 菟（しるしの竿）

筑紫廻国の春をむかへて、山里に生海鼠あり、浦里にこんにやくあり、何事もとほしからず

海山に事はかゝじな四方の春

涼 菟(同)

「今へ色時に鯉や」の句の作者荊口は大垣藩士宮崎太左衛門、前書中に見える千川はその次男岡田治左衛門、同じく大垣藩士で、此句は恐らく千川が江戸詰めで出府の時、父荊口が酒についていましたもので、千川は大酒飲みか、酒乱の癖でもあつたのか。酒に關する彼の句を搜したが「菊の香やふるき難波の吞手共」(『韻塞』)の一句しか見当らなかつた。本集には又彼の「名月序」が収められてゐる。

哀傷の部には文章と去來の悼句が見えるが、この蕉門の篤実な二人は前年の宝永元年に歿してゐる。即ち文章は元祿十七年二月廿四日、去來は宝永元年九月十日に死去してをる(三月十三日改元)。去來の悼句を詠んでゐる朱拙には『芭蕉盟』にも「十日浴にして去來の墓參に」と前書した「昔我が友よ十日の菊の形」の句が見られるが、去來生前に朱拙と交渉があつたのであらうか。

「正月を出して見せうそ」の去來の句は『既望』に「稚きものを愛して」として入集してをり、『芭蕉盟』には「いとけなきものを愛して」と前書して見え、それ／＼中七が「見せうか」となつてゐる。斯く朱拙系の三俳書に採録されてゐると云ふ事は、朱拙が余程此句に關心を有してゐた事を示してゐる。然も此句が見られる最初の集が本集だとすると、これは去來最晩年の作であらう。元祿十七年春の吟とすると、長女登美が十歳、次女多美が八才のいたけ盛りの初春の句といふ事になる。

「肥後小国 西女」の「兄弟の顔見合せて」の句の前書に「亡父西国が七めぐりの齊に」と見えるが、西鶴門の中村西国は前引『古哲伝草稿』(著者不詳・文化文政頃成か。日田市橋本正樹氏蔵)によると元祿八年四十九才で歿してゐるので、

七回忌は元祿十四年に当る。尙、句中のくゝゝの季から夏に歿したことがわかる。『古哲伝草稿』や『龜山鈔』（森春樹著・文政十三年成）には西国は一子を肥後小国奴留湯家に養子にやつた事が記されてゐる。西女は夫惣左エ門（俳号国湯）の父の意味で「亡父・西国」と記したと思はれなくもないが、然し支考の『梟日記』に「なにがし西国といふおのこのゆかりの人にておはせば」の記が述あるが、父子の關係をゆかり人と云ふのはどうもしつくりしない。主人国湯が西国の実子と云ふ感じがしない。私には国湯妻の俳号が西女と云ふのは西国の女の意味で号してゐる様に思はれる。西国の一女が国湯に嫁いたと考へる方が、国湯をさして西国の「ゆかりの人」と云ふ言葉にびつたりする様である。実子の国湯に父の追善句がないのに、七回忌に養子先の嫁が義理の父の追善句をわざ／＼発表するのどうか。西女は西国の娘の様に思はれるのである。

「若竹や」の朱拙の句の前書によると、朱拙は宝永二年五月七日一子を亡くしてゐる。此事は今迄どの俳書にも見られなかつた事実である。又これと關係した魯九の「籠り居る」の句の前書によつて、魯九が宝永二年に日田を訪れた時日を大よそ明らかにし得たのは倅せであつた。

芭蕉の「里の子よ鞭おり残せ梅の花」の吟は

さとのこよ梅おりのこせうしのむち

（真蹟・栞集）

里の子等梅折のこせ牛の鞭

（前後園）

の二つの形で従来知られてゐたもので、『栞集』は後年刊行されたものであり、『前後園』（元祿二年刊）は他流の言水の撰でいづれも信用度のうすいものであつた。其の後貞享四年秋執筆の真蹟が現存することが発見されて、句形も真蹟の方

が信頼され、年代も貞享四年頃のものと考えられるに至つたのである（頼原退蔵博士著『芭蕉俳句新譚』参照）。ところがこの書の所載句はそれらと又句形を異にするものであつて注目される。添書に「天和のはじめ、浪士なにかしのもとにの吟なり」とあり、年代がやゝおくれるだけ勿論この記事も疑はしいがあるひは何か依るところがあつたのかも知れない。

去來の「世の海に高飛したる」の句は『芭蕉盃』にも見え、「長崎へ赴く道中」と前書がある。これについて頼原博士は『芭蕉・去來』の中で「これは五月中の作とせねばならぬから、恐らく元祿四年以前のある時の事であらう。「高飛したる」などといふのにも、何かもつと若い折の語気が感ぜられる」と述べてをられる。博士が元祿四年以前の句とされるのは、元祿十一年の去來の長崎旅行の時期が秋に當つてゐたからである。然し本書の「肥前の舟中口号」の前書により、元祿十二年夏、長崎滞在中の去來が所用か何かで肥前の海上にあつて吟じたものとも考へられる様である。

十八丁に朱拙宛の其角書簡の一部が記載されてゐるが、この句は助然の『続山彦』に

「しのばずが池へは私宅より三十余丁なり

寝てかどへ蓮にさそふあさぼらけ 其角」として入集してゐる。朱拙と其角の交渉は明らかでない。たゞ『星合集』の
ひととせ晋子と六味丸の店にまかりて、短冊のぞミ侍るに

主は誰山吹いはず六味丸

柳さくら都は春の六味丸

其角
朱拙

の発句及び前書によつてその關係が考へられてゐるが、これとて年代を明確になし得ない。『古哲伝草稿』には翁歿後翌

年として、朱拙が江戸難波橋に其角を訪うた時、其角がものした「送朱拙兄序」と云ふものが掲げてある。これによると朱拙は十一月から翌年五月迄江戸に滞在してゐた様であるが、元祿八年冬は惟然と共に日田に朱拙はゐたのであるし、他の年月にさうした期間を見出し得ず、従つて其角生前の朱拙東武行には私は今のところ疑問を持つてゐるのである。唯、この書簡によつて朱拙と其角と、二人の間の交誼がある程度考へられる。

「しらぬ火や夜寒さのほる」の怒風の句はその前書「肥後の国八代の海にしらぬ火見物に罷りて」とあり、九州行脚中不知火見物に八代を訪れた事がわかる。怒風は九州には屢々杖を曳いてをり、元祿十一年支考来遊の時は朱拙と共に黒崎にをり（『梟日記』）、元祿十二年野坡が長崎に旅寝の頃には又長崎にあつて共に名月を賞してゐる。その後享保元年にも九州にあり、行脚中の露川と長崎で会してゐる（『西国曲』）。制作年代は明確でないが、元祿十二年の九州行脚中の吟か。この句は又前書なしで寸木撰『花の市』（正徳二年刊）にも見える。

會米の「牛売て伯母の道きる時雨哉」の句は「山彦集に去来とあやまりたるから爰に改め侍る」と添書があるが、爰に『山彦集』と云ふのは『続山彦集』の事で、成程同集「牛売て伯父と道きる時雨かな」の句の作者は去来となつてゐる。しかも後の蝶夢の『去来発句集』（明和八年刊）には追加としてこの句を収め、故安井小酒氏の『蕉門名家句集』も去来部に収め、如れも誤を襲うてゐるのである。これが本集によつてその正誤がはつきりしたわけである。

梅丸の「月雪と集めて梅の」の句の前書の「宗因を師とし、はせを翁をしたふしれもの」と云ふのは朱拙を指してゐる様に思はれる。朱拙は『土大根』中に「拙、大坂の客舎にあるころ西山宗因にむつびて連俳の事を問ひて云々」と述べ、又同集に「拙が曰、しかりひとせ故翁（芭蕉）難波の旅店にいまそかる比、文通に此事を問ひたるに」とも云つてゐる。

又『芭蕉盃』に芭蕉から直接おくられたと云ふ付合を並べ、その序中にも「於乎亡師いまそからば此体段をゆるし給はんや」と記してゐるのである。宝永以後朱拙は九州地方の俳人達に斯うした事を話し廻つてゐた様であるが、これは前述した如く初期の彼の足跡から考へて疑はしく、例の「宗祇の蚊帳」のたぐひと思はれるが、蕉門故老達と對抗するには斯うした策略が既に朱拙には必要になつて来てゐたのであらう。

『漆川集』の所載句について述べたい事は未だ外にもいろいろあるが、紙数の加減でこの位にしておかう。とまれ、この『漆川集』板本の発見によつて斯うした幾つかの未知の事柄が明らかになつたのは誠によろこばしい。

尙、最後に述べたい事は、宝永・正徳・享保にかけて九州には野坡・孟遠等の勢力が可成り扶植され、特に野坡の筑前・筑後・肥前・豊後方面の勢力は侮り難いものがあつた。田代の紫白・紫青等の俳人達、内野の助然、その他の人々は後年坡門に走り、野坡の指導を受ける様になり、朱拙は可成り苦しい状態に落入るのである。然し、斯うした時なほ、嘉穂俳壇の多くの人々は篤実に朱拙の指導下に結束を固めてゐた様で、享保九年、同地飯塚の菊田有隣が久方振りで朱拙の後見のもとに『芭蕉盃』を編集刊行したが、『芭蕉盃』には土明・知方の句以外に多くの同地方俳人の句を見出す事が出来るのである。(一九五三年七月二十五日)

筆を擱くに當り、貴重な『漆川』集原本の翻刻紹介を許された、その所蔵者九州大学教授田村專一郎氏、並びに本稿の執筆に多くの援助を受けた九大文学部特研生大内初夫君に深甚なる謝意を表す。

誹 諧

漆川 土明 撰

俳諧 漆川集序

漆川は野見山氏土明の撰編なり。土明語らく、凡風雅堅地ならされは、表向うつくしうぬりまへしても、いつとなく打はかされて、花鳥の入物口惜うなりもてゆける。世の中の有さまを此名に寄せてまもれるなりと、於乎風流男なるかな。他日俳城の英雄となりて、乾坤の箱に造物の出し入、心のまゝならん事疑ひあらし。此所西に助然、北に季水、南に知方おりて、各その手をかためり。今亦此主東方を塞けつれば、いかなる吟人狂客入替くあら手を寄せたりとも、句吹はやの精兵四人かこゝろを合せて、茶つけ攻にせめ付たらは、つゐにやり句を出させず。声先の高名にハ大盃を投出して、右往左往に欽ちらさは、むくつけきやつこ豆腐も座中にたまらず。大勢は頭巾をおろさせむ事、日をかそへて待へし。麥に應し機を照らして、あふなき処を仕てとらは、蕉翁何人そ。つとめよく、もとより此筋へ人の心を種子として、萬の笑ひのはしめならずやなと戯れ捨て、此亭の燈下に足をのほしてふしぬ。

歳 旅 乙 酉 冬 蜡 月

朱 拙 謾 書

名 所

箱根越す人もあるらし今朝の雪

天和の初の吟なるよし

芭蕉菴眺望

葛飾の郡はなれし花の雲

化粧水、横まくら、念仏水と
いふは豊後の名蹤なりと
朱拙か文に聞えければ

蝶くの花にはこふや化粧水

あはれ露一粒撰に横まくら

秋立てちらりとしけり念仏水

辛崎のあたりに吟行して

真野は二度勢多には今や初時雨

白波や慕風こしのあした比恵の山

定宿に星も休や鏡やま

芭蕉老人

江戸杉

風
三才

伊賀土

芳

同半

残

同非

群

江戸野

坡

大坂諷

竹

尾州露

川

夏浅し臙もはけす淡路島
あけほのや山吹の瀬のみたれ鯉

美濃木
大津松

因
毘
「四才

餞別留別贈答

崎水の宇鹿と、ふこの地に
別るとして

とせう骨定めて春へ花わたり

豊後朱

拙

西国へ行人に

鯛の背を詠めてすゝめ汐の旅

膳所酒

堂

江戸を出ける時

山雀の家を尋ぬる霜路哉

野

坡

博多を出るとして

笠の端や昼中暮て汗拭

土

明

但馬の国の山家にて吟筈を
引つられて

薄着する我引とるな冬かつら

僧
惟

然
「五才

老て旅立人に

いさ火燧わたれ野に向顔てなし

筑前野

吟

伊勢の涼菟我か郷に
年をへ睦月の十日あまり
肥後の方に赴けるに

蓑虫の荷は軽みたり雪なたれ

朱

拙

千川か江戸へまかりけるに
酒の事なといましめるとて

今は色時に鯉や鴻の池

美濃荆

口

東武におもむく人に

金罽に春は桑名の七里かな

肥後小川残

考

参官の人に

若竹や頭をのしあけて日和雲

丈

草

長崎にある比おかしきものゝ
雪の発句のそみけるに

此虚言そ障子一重の雪礫

朱

拙

遠州嶋田の夜泊は塚本氏

六才

の家を尋ぬへかりしを夜
ふけたれへ腋宿に泊り
けるにおくり物なとありし
かへしに

有宿を忘れて霜の薄着哉

哀傷并懐旧

憶丈草

ちる花を狂ひ残してはなれ猪

悼去来

眼を明て思案も出来す菊の宿

亡父西国か七めぐりの齊に

兄弟の良見合てくゐなかな

四方郎の主人五月のはしめ
愛子をうしなへれける事
文月の文のたよりにきこえ
ければ其なけきを追憶
して

野

坡

酒

堂

朱

拙

肥後小国西

女
七
才

稲妻も是もおとろく文たより

長崎宇

鹿

目に見えぬ耳のあへれの一葉かな

同古

道

追従の涙是見よ山の露

同砂

丈

さゝめたる手もとも今へ薄月夜

同楚

戎

今年五月の七日老杜か

同

戎

わすれかたみとももてなし

同

戎

つるおの童をうしなひて

朱

拙

若竹や袖にはり合水の玉

朱

拙

照るそれも恨られけん花葵

筑前一

定

朱拙のぬし愛子の別に

筑前一

定

籠り居られし折から

美濃魯

九

我も此里に旅ねして

美濃魯

九

籠り居る人なくさめよ花あふひ

美濃魯

九

祝言

日の春を豊に鶴の歩みかな

江戸其

角

稚子を愛して

正月を出して見せうそ鏡もち

京 去

来

「九才

若 菜 八

怨に名につまれたる若な哉
土あそひはしむる鳥の若な哉
七出や六日八月も宵のほと
七くさにきつと古葉の余寒哉
鶯の口出ししたる若菜かな

大 津 正

豊 後 婦 里

土

越 中 嵐

鏡 前 是

秀 明 人

青 明 寸

梅 八

里の子よ鞭おり残せ梅の花

天和のはしめ浪士なにかしの
もとにての吟なり

京なる人の県の四とせ

翁

「十才

五とせなりし許に

まかりて

京を出て正月五ツ梅の花

口明て又鼻向けて梅のはな

山雀の扶持はなされか梅の花

またさかぬ梅の梢や三かの月

枝くの有たけ梅の月夜かな

春雨は

春さめや蟲の土のゆすり合

そは切の腹は分なり春の雨

かすみ

山雀にそら言させる霞かな

笠買ふて海おもしろき霞哉

松の木になしみかゝりてかすみ哉

朱

筑前知

三河白

諷

野

丈

野

筑前助

美濃嘯

土

拙

方

雪

竹

坡

出

坡

然

風

明

かはつ

春なれや田の青海苔に啼蛙
吞込んで鳴やかはつの星月夜
萍にさそふ星ある蛙かな

彦根許

尾州荷

肥後河尻心

六乃計

椿

老婆の眼と赤う列立椿かな
梢より活て椿のしほらしや
木の下へ律儀に落る椿哉

朱

杉

尾州斗

拙風旭

奉納

拍手に落て玉なす椿哉
飛植にしまらぬ庭の椿かな

江戸嵐

越中浪

雪十二才
化

上己は

雛の日はなを恥かしく指の爪

野

坡

留主をする我なわすれそ雛あるき
我がくににくらへて嬉し雛の里
雛の日や動氣せくりて懐手

肥前園部婦紫

長崎遊女花

石

花は

大和路を花順礼と名乗らはや
起くの腹にたきるや花の空
人らしき貞を出すや花の空

正 筑前季助

秀 水 然

十三才

さくら

有明も葉の闇くらし花さくら
編笠の乗時花ははつ桜

木 筑前甫

因 道

夕ぐれの橋といふ

題をさくりて

此橋て明日もそろへん山さくら

朝の桜といふにて

朱

拙

爰に來て又今日もさくら哉
骨折を今年見て取桜かな
伯父の手にいらしくと桜かな
春の日に桜は餅に砂糖哉
沙汰もなき里の仕出しや八重さくら

春の題しらす

乗の蓑の着そめや腹赤釣
行厂や平野八講あれ仕廻
取しめぬあそひ心や土筆
梅の木に囀りすてる雀かな
饅頭をならせうならば柳哉
黄鳥や野そらに或て唄はたけ

水 鶏 は

肥前の舟中口号

九州蕉門の研究

筑前野 宇
土
豊後 寂 野

江戸吏
大津 楚
豊前 梅
筑前 野
美濃 如
豊前 其

鹿 情 明 坡 芝

邦 江 丸 涼 行 香

世を海に高飛したるくるな哉
夜あるきに母寝させつる水鶏哉

去 其

来 角
十五才

ほたるは

石菖に螢のほしき夕かな
後手に文を請取ほたる哉
こそはゆき振もほたるの後かな

杉 季 土

風 水 明

芥子の花

金屏に風をとる日や芥子の花
三日月や照とゝかねと芥子の花
聾か来て一荷もとてやけしの花

肥後河尻 榻
筑前 霜

吟 輪

若竹

若竹に音の付たる見込かな

字

鹿

土

明

若竹にたましゐすへる雀かな
若竹の取広ヶたる月夜哉
葉に立て初三日月や今年竹

時鳥

卯の花に空取立てほととぎす
十六夜や峯片わけてほととぎす
薄羽織着て出る空は時鳥
有明のかけたと鳴かほととぎす

夕たち

夕立や三日うそつく藪林
ゆふたちに遊ひ直すや鳥の声

題不知

五月雨や投足見する桐の花

九州蕉門の研究

肥前田代婦 紫 助 甫

白 然 道
十六才

朱 豊後野

拙

是 尾州東

紅 寸

尾州東

推

知

方

り

ん

宇

鹿

九州蕉門の研究

六四

なつ草の冥加をあれとちる桜
夕立は山にひかへて鴈緋かな

長崎瓜
大津細

堤十七才
石

助然亭にて

山水に手巾軽ミ付日かな
捌き得ぬ夏野の牛の尾先哉
暗かりを出れば恥かしあやめ草
五月雨の道を盗んで小芝原
夕顔にほとけて渡る雀かな
ぬか味噌に蓼の青ミや朝ほらけ
ぬり笠の若葉に沈む夕日かな

一
長崎單

才定

紫
長崎春

貞坡

野
魯

情

正
秀九

秀九

しのはすか池へ私宅より

三十余丁なり

寝て門へ蓮にさそふ朝朗

其

角

あり明のほとゝきすならば
敲き起してもいひ触十八才
ぬへぎに眺かけてすゝみ

ふかしたる人のいりて起出
ぬらんと二半にさそひたる
にて御座候如何々々々
御推敲冀のみ

朱 拙 様

其 角

牛 女 は

一夜さを人かわるさに里の沙汰
七夕の其身明てや夜のねたみ
行里にはつと小笹の雫かな
もの一夜逢とて星のならしかな
文月のすまぬかハるや天の川
七夕の尻をはかすや穂光り

槿 花

看経の間をあさかほの盛哉

九州蕉門の研究

朱 古 土 又 紅
拙 道 明 推 人
玉
十九才

許 六

六五

薜のそれも 千年か露の王
あさかほや葉にうつしても花の露

友とちの不和なる中直り
とりもちて

槿花や葉に交るも水の味

慕 風 (Can)

あえられし慕風むかぜの草の休ミかな
さしませて稲妻走る野分かな

秋 虫

鈴むしに息をかそゆる夕ア哉
我が事とおもふて鳴やきりくす

茸 狩

松たけやおなし寒さにをなし色

諷

土

朱

知

是

京

為

野

浪

明竹

拙

方寸

二十才

有吟

化

茸狩や此^コ方^チの眼も借す草履取
茸狩や胴打ッ所に転^マひ出る

おもふ事といふ五字を句の
上にすえて草の穂七夕
寒さの題をさくりにて

草のほは

おもふ事穂に出てのける野はら哉

七夕は

おもふ事夜中に明て星の里

寒さは

おもふ事かたりほそむる寒さ哉

名月序

馬上に梨^アを横たえて月

明に詩を吟するは懸

野季

紅水

朱

拙
廿一
オ

紫

貞

り

ん

命の常にしてしのゝを
ふく露枕いはほに
肝をひやし荒磯の
波に足をみかき炎雲
鉄衣を灸り寒風重
瘡に徹りて心身の
勞しはらくもいとまなからしむ
身の今や奈良さらしむ
はたへ涼しく月下に友を
引ては醇―酒殺―核の物
好して尻餅の化にほこる
ハありかたき時なりける仲
秋東武の明にあそぶ事を
とゞし去年ことし故国の
秋にへたゝる事すへて三たひ
名にしあふ武蔵野の良夜に
あまた度あひぬる事又大なる
幸ならすやされとも籠を
開て鳥を放つのおもひ
止事なし秋の風空に
吹てすのまた川に鱸魚

蕁菜の時なつかしく
虫の声草に聞えて
青野かはらに友をしたふ
たゝ東一海渺一とたゝえて
開一山万一里の外に魂を
なやますのみなりこゝに
おゐて主一客をのゝ月に
たよりあらん所くをさくり
題にして客一愁方一寸の
胸をはるけんとなす明年
家に在て猶すこやかならん
此会此こゝろわするゝ事
なくへ今宵風一光の信
を契れと也これか為に
筆を把て馬荻齊千川

里
は

相伴に野上の月や不破の葦

九州蕉門の研究

「廿三才

川
「廿四才

濃州千

六九

山 は

俳諧て月には鐘を端の岡

全遊

糸

川 は

西行の鮠も管瀬の月にとへ

全素

紅

老楽や刻ミ歩もけふの月

荆

口

名月や仮屋調ふ蒲簾

正

秀

名月や照られて沉む山の形

豊後馬

貞

或亭にて

名月や粟に肥たる鶴の友

酒

堂

あると有物を今宵の月のため

野

坡

木啄^{キツキ}の見立も若しけふの月

寂

芝

士農工商の

題をさくる内に

杉葉ある嘉吉か家をけふの影

大坂舎

羅

高なしに猪寝るやけふの月
一そらを草木に出して月の老

百舌鳥

馬買ふて打乗上や鴟の声
牛買の旅や荒たる鴟の声
眼に列て尾にはたらくや鴟の声

九日

賑かて亦静にて菊はたけ
秋の日をたらしめて菊の赤ミ哉
しら菊ハ何んのと咲か霜の中
そやさされて田地ハ買ハし菊の花
祭り日の言葉や出来て菊の花

雑題

蕙若し薺ハ早鐘のこゑ

大津江

土

明石
〔廿五才〕

長崎卯

七

筑前其

紅

同松

律

杉

風

土

明

知

方

千

川

助

然

荆

口
〔廿六才〕

厂の声少ハ風もあるかなり
 かも瓜のあたまからちる柳哉
 我か秋そ秋そと薄穂にわたる
 頬先の憎い仕出しに芙蓉哉
 椎檜に秋有付けて夕日かな
 萩薄 声 聞 分 る 兎 かな

肥後の国八代の海に

しらぬ火見物に罷りて

しらぬ火や夜寒さのほる草の先
 まはゆかる癖と照く薄丹葉
 桐の葉のうらへ廻るや稲ひかり
 秋の日の届キきらすや漆畑
 秋の日やあなつり過て高半時

時 鳥

てんく に夜明る星と時雨かな

肥後 文 如
 肥後 軽 文 如
 全 飯 杉
 全 土 明
 風 明 足 芦 出 行

美濃 怒
 肥後河尻 野
 筑前 散
 全 為
 伊賀 万
 乎 百 木 狂 風
 廿七オ

野 坡

櫻欄の葉に屹とあてかふ時雨哉
乳渴ツカの子ある隣や小夜時雨
八專のそらにさし込時雨哉
蝶鳥に意地を付るや朱しくれ
時雨るとしらせかましや藪の音

京にて

宿酒のあまり見出しつ村しくれ
物の葉に乗れば幾度初時雨
牛売て伯母の道きる時雨哉

山彦集に去来とあやまり
たるから爰に改め侍る

時雨るや鳥の尾先の下る程
初しくれ妹か茶かすの捨所

雪あられ霜

初雪や中間破して日照雲

九州蕉門の研究

肥後河尻 素

筑前 風

尾州 素

朱 士

旭

然

覽

明

拙

文

野

長崎 會

山

吟

米

推

紅

廿八才

野

又

伊勢 涼

兔

九州蕉門の研究

七四

初雪にうそつかせたる日和哉

初雪や空膳ひてふり直す

引懸て股野を投げし竹の雪

ふところへ雪の落たる木陰かな

初雪や星へ其まゝありなから

霜雪に角して取らは鳥かな

囀トスガシにあられさゝやく杉間哉

雪ふりや舟の中なる人の声

前豊の山家にて

目の替に屋根と畑や霜の花

寒さといふにて

一人にも逢へぬ野原の寒かな

又明日と詠めて鶴の寒かな

子共やとひて町家に

つかはしたるに遅う販り

筑前市

其

江戸太

一

土

筑前至

全冷

朱

杉

助

情

水

角

大

定

明

州

村

拙

風

然

ければ

藍瓶アイビンに切キをうしなふ寒さ哉

餅つき

妹か子やはしかみといて餅の番
餅搗モチウや藪有躰ヤブアリタマに夜の明る

落葉は

何の坊かの坊寒き木の葉かな
踏フミ込んで足もよこさぬ木の葉哉
薄着ウスギする人とおもふかちる木の葉
爰ココに来て我狂ワケへせよちる木の葉

鷓鴣

無名庵ムメイインにある比

みそさゝる我鍋ワカつかみ見てくれな
楡ユの木に支度シドらしさやみそさゝる

九州蕉門の研究

丈出

其角
土明

露川

江戸潤志

肥後使帆

大津尼智月

惟然

甫道

梅の木にとまり当たりみそさゝる

筑前一

七六

冬の題しらす

年わすれそちの椿の咲たなら
時雨れうとおもふて咲や枇杷の花
冬形に生付たる生海鼠哉

江戸袋野朱
拙坡角

宗因を師としはせを翁を
したふしれものに招かれて
月雪と集めて梅の多さかな

隠士を訪ひて

梅丸

眠らはや相手へ多し山つゝき

作者不知

此句東武の素堂なりとて
或人より贈らる不知是否

水仙はそのままつれても花咲敷

筑前少年梅旭

筑後の国青野原にて

馬上の口号

睡たかる我さゝめけん冬の笹

四方郎のたゝすまるを
戯れに画して茅屋に
なくさめるおりから
爰の連衆に遠近の
友もまろひこみて一日の
とやきとなし侍りぬ

短^{トテラ}衣着る形も冬野の旅鶉

今年も雪は西国か勝

大胆な舟て仕当る分限にて

噂はかりに御触ついやむ

あり有て着のとれぬ月の比

生^キ綿の内ハ意地と又降

あとてなき姫路の盆のかすかなり

浪^{ナミ}く中に鍵もうち喰ふ

いつやらの六十六部しかとせぬ

帯屋の娘大ふとりする

九州蕉門の研究

野

朱

吟

土

助

野

季

甫

知

朱

執

野

七七

拙
冊一オ

明 然 情 水 道 方 拙 筆 吟

冊二オ

遊ひ日の塀越うつる燭明り
 風呂鋪を取ル重に饅頭
 此秋はめてたう御刺いたゝかれ
 左官かなくて寒う名月
 段く初鴈しほの通り衆
 神樂のはつほ大豆て肝煎ル
 鍋釜もきらく花の十五日
 もはや燕も二三番立ツ
 陽炎に草鎌配る八瀬の谷
 座頭のむす子祭しに来る
 たんからの手染引はる椽まへり
 昼定つて寝癖つきたり
 菅笠の背中へまわる繩手みち
 葉師の守の直てなき也
 ひそくと八朔過の月見沙汰
 鉈木屑のこる露霜

助 土 野 知 甫 季 野 朱 土 知 野 甫 季 野 助 土

然 明 吟 方 道 水 情 拙 明 方 吟 道 水 情 然 明

卅三オ

提て見て直きる出店デの鳩トビ髭ヒゲ
 とこてかたしか見たる釣ツリ髭ヒゲ
 紅ニ時の最上は恋のおもしろき
 伯父といふ子に絵を書てやる
 大切な玄ホノ猪コにあふて餅モチきらひ
 四五イハ疊タテはかり疊タテほしたて
 髪カミつんで按ア広ヒロになりし奉公落
 醬油仕シかける海苔ノリに菰コシユサ蕨ワラビ
 花の中やうく伊賀の年頭に
 麦としれたる春の日加減

野 吟 五 句
 土 明 五 句
 助 然 四 句
 野 情 五 句
 季 水 四 句

跋

甫 道 五 句
 知 方 四 句
 朱 拙 二 句
 執 筆 一 句

野 季 甫 知 野 土 助 野 季 甫
 情 水 道 方 吟 明 然 情 水 情
 道 道 道 道 道 道 道 道 道

道
 卅四才

八雲御抄に、漆川は此国に有とはかりにして、其所たしかならず。儒官なにかしの名寄にへ、御笠の郡に入玉ふめれ

と、宗祇居士の指南抄にへ、嘉戸の郡漆生ウツシノといふ所にありと記したまふを、我か方の最原に四方郎の旅ねをかたらひ、河
辺の林間に松の葉のなま酔をすゝめて

「卅五才

いさり 込む 山 松寒し 漆川

士 明

いさゝらは 眠アガリ見せむうるし 川

野 吟

漆川 黒は 見えす 冬の 鮎

野 情

茶の花に日へ休ませて 漆川

甫 道

唐網に雪の光りやうるし 川

遊 川

梅咲てとる やら寒し 漆川

助 然

腰懸て 春待鳥や 漆川

知 方

此組て木の葉さらえよ 漆川

朱 拙

なとうめつり捨て、此集のはしくれとへなりけり。猶菜の花のつやゝかなる春の色香へ後の人つけれと、くたくしき冬
枯の根蕪まろを蒔まけるのみ。馬焉魯魚は見ゆるしたまへとしかいふ。

宝永二年 酉 十二月

筑前 土 明 撰

京寺町 二条上ル

書肆 井筒屋 庄兵衛板